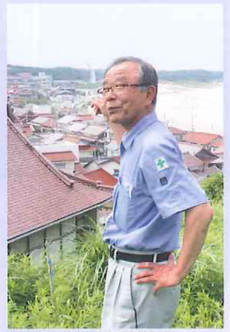
石見焼の伝統をさらなる未来へ

石州瓦



石州瓦工業組合専務理事
佐々木啓隆さん

良質で耐火度の高い粘土、来待石を原料とする釉薬、そして大甕の制作技術。これらが石見焼を天下の「やきもの」たるものとした基礎であった。

そこからさらに発展を遂げ、世界遺産となった街並みを彩り、今日なお高い技術と品質を脈々と受け継いでいるもの――それが石州瓦である。

温暖な太平洋側はともかく、寒さ厳しい日本海側においては、来待色とも呼ばれる、赤褐色の石州瓦が広く使われている。

来待石を原料とする釉薬を施して焼いた瓦は、堅く焼きしまり、塩害や寒さに強いのである。

石州瓦工業組合の佐々木さんはいう、「今までもそうであったように、これからも本物しか残らない。後世に残る建物、街並みづくりに貢献する」と。

赤い街並みを俯瞰して、初めてその色の持つ機能美に魅せられた。

石州瓦は４００年の英知によって培われてきた、この地の自然と共生するための道具であった。